

『フリードリヒ大王伝』におけるメンツェルの挿絵

糟谷恵次

A. Menzels Holzstiche in der “*Geschichte Friedrichs des Grossen*”

Keiji KASUYA

はじめに

ベルリンの美術史家フランツ・クーグラールの筆になる『フリードリヒ大王伝 *Geschichte Friedrichs des Grossen*¹』は、1840年3月から1842年の夏にかけて20分冊で刊行された。フリードリヒII世の即位100年を契機とするこの出版物は、刊行と同時に広範な教養層に受け入れられ、その後、現代に至るまで数多くの版を重ねている。しかし、学術的な書でもなく、また民衆本とも言いがたいこの書物が現代にまで生き残ったその理由が、それに寄せられた400点にも及ぶメンツェルの挿絵の魅力にあったことは言うまでもない。ドイツ挿絵本の歴史の中で、また挿絵画家としてのメンツェルの道程において、『大王伝』が有する意味と位置を問い直してみたい。

1. 歴史と写実

1839年、ローラン・ド・ラルデッシュ著『ナポレオン伝 *Histoire de l'Empereur Napoleon*²』がバリのデュボシェ社から刊行されるや否や、ライプツィヒの出版者J. J. ヴェーバーは、いち早くこの絵入り本のドイツ語版を印行し、また同時に、これに匹敵する自国の伝記本の出版計画に着手する。翌年の1840年がフリードリヒII世の即位100年に当たることから、この偉人の伝記刊行を決定したヴェーバーは、即刻、

歴史家プロイスに執筆を依頼するが、4巻にもわたる浩瀚な大王伝を上梓し終えたばかりの彼に願いを退けられる。しかし、そのプロイスから、当時ベルリンで美術史の教授をつとめ、歴史に関する博識と文才で知られたフランツ・クーグラールを推薦される。クーグラールは申し出を承諾し、同時に挿絵担当の協力者としてメンツェルの名を挙げる。出版者ヴェーバーに宛てたクーグラールの推薦文には、当時まだ無名に等しかった若きメンツェルの画才への賛辞があふれている³。

すでに述べたように、ライプツィヒの出版者が希望しクーグラールが執筆したものは、学術的な書物でも、また民衆本の類でもなかった。むしろそれは、「祖国の同胞たちへ」と題された著者の序文⁴が示すように、半世紀前に崩御した亡き国王の生涯と偉業に関心を抱く広範な教養層を対象とするものであった。具体的に描かれた54章の本文は多くの逸話を生き生きと伝えており、すべてを鵜呑みにしてはならないものの、今日でも平易な教養的娯楽書として興味を惹くものとなっている。

その間に歴史研究は、盲目的に国王を崇拝する傾向にあった後期ロマン主義の無邪気で表面的なフリードリヒ像とは本質的に異なる人物像をうち立てた。しかしながら、多くの研究者の指摘どおり、この題材を具象化したメンツェル

の挿絵は、このことと無関係に十分に価値ある芸術的妥当性を有している。むしろ著者以上に画家の方が、原典を直接利用し有効に活用する能力にたけていたようにも思われる。

メンツェルみずからがこのことについて、王だけでなく、王の歴史に絡み合った大部分の人物の当時の肖像画が手本としていかに役立ったかを、『大王伝』巻末で次のように報告している。「生活の外面的造形、時代趣味に、また建築物、用具、衣装、社会風習における生活のさまざまな変化に関係するすべてが、特色のある手本の研究に基づいている。そうした手本は、あるものはオリジナルそのものに、またあるものは模写か、あるいは文字でわれわれの時代に伝えられたものである。重要な場所の景観、特に王宮の外観は、ほとんどすべてが写生によって描かれている。軍服の、またその階級の正確な描写には少なからぬ配慮がなされている。外国の軍隊に関しても、またプロイセン軍に関しても同様である。プロイセン軍の軍服に関しては、元の軍服の備蓄がふんだんに残され現在でもベルリンに保存されているため、広範な研究に格好の機会を与えている。⁵⁾

ここで重要な点は、メンツェルの歴史にたいする徹底的に写實的な姿勢であろう。歴史への取り組みは、すでに『大王伝』以前から始まっていた。10代半ばにしてメンツェルは石版画連作『ルターの生涯 *Luthers Leben*』(13葉)を制作し、また父の死後工房を継いでからも精緻な筆致の石版画連作『ブランデンブルク＝プロイセン史回想 *Denkwürdigkeiten aus der Brandenburgisch-Preussischen Geschichte*』(12葉)を刊行している。それらのいずれの一葉も、優れたデッサン力と精確な石版技法に裏打ちされた、歴史的事件の描写であった。ゆえに、『大王伝』での歴史への取り組みと、その徹底した写實的志向は、画家メンツェルの制作過程の中で

ごく自然な取り組みとして受け入れられたに違いない。カッセルに住む友人の壁紙製造業者アルノルトに宛てたメンツェルの手紙の一節は、そうした事情をよく物語っている。

「……フリードリヒはなにものにもまさります！これほどまでに私の心を掴んだものはありませんでした。題材はたいへんに豊かで興味深く、雄大です。あなたは首を横に振るでしょうが、よくよく知れば知るほど実に画趣に富んでいて、この時代の一連の偉大な歴史画を描けることを幸せと思います。⁶⁾

2. 手本と影響

『大王伝』刊行の直接の契機がラルデッシュの『ナポレオン伝』であることはすでに冒頭で述べた。『大王伝』の挿絵制作にあたってメンツェルがこの著書のヴェルネの挿絵を十分検討したことは疑うべくもない。またそれは出版人ウェーバーの意向でもあった。56章900頁余のこのフランスの読み物は、各章が章頭飾絵とイニシャルのヴィニエツトで始まり、テキスト頁の1/3ないし1/2大の挿絵を平均2頁に1点の割合で配している。挿絵本としてはきわめて多くの挿絵を有するといえる。挿絵の配置、その豊富な点数において、『大王伝』はこのフランス本を忠実に模している。しかしながら、次のボックの言葉どおり、その模倣があくまでも外面的形式にとどまっていることも明らかである。

「挿絵を二重の囲み線の中に組み入れる版面は忠実に保持された。つねに主張されることだが、メンツェルはこの手本をはるかに凌駕し、メンツェルの挿絵様式に対するヴェルネ作品の影響は外面的な類似にとどまっている。このフランス本は30年代パリの挿絵技法のごく平均的な出来映えであり、最良の出来とは言えない。メンツェルはしかし、彼の書簡からも明らかのように、20年代の最良の作品に精通していた。

ジョアノ、ジグー、ドーミエらの木版作品は原画と彫版においてヴェルネの業績をはるかに超えているのである。⁷⁾

また、素材の点で直接の手本はすでにベルリンにあった。1778-92年、フリードリヒ・ニコライは『国王フリードリヒII世の物語 *Anekdoten von König Friedrich II.*』を上梓し、1793年の版にはダニエル・ホドヴィエッキの銅版画6葉が添えられていたからである。ホドヴィエッキのこれらの挿絵をメンツェルが知らなかったはずはない。18世紀後半のドイツ挿絵史にとってもっとも重要なこの画家は、その写実的姿勢とならんで、素材の点でも多くの影響をメンツェルに及ぼしている。

3. 新たな技法の試み

『大王伝』の挿絵制作の仕事を得たある種の偶然が、画家としてのメンツェルのその後の展開にとって大いなる一步となったことは否定できない。しかしこのクーグラー本の挿絵に至る道程は、ある意味で必然的とも言える道筋であった。400点近い挿絵の前提になった大きな二つのファクター、それはひとつに、既述の歴史に向けられた徹底して写実的なまなざしと、今ひとつは木口木版という当時ドイツでようやく用いられ始めた新技法であった。それもメンツェルの場合、鉛白をひいた木口の版木に鉛筆で直に下絵を描くといった新手法をとった。これは一般にファクシミリ木口木版と呼ばれる。メンツェルはこの手法をすでに1839年に『ペーター・シュレーミール *Peter Schlemihl's wunderbare Geschichte*』の挿絵制作においてウンツェルマンの彫版で実験している。

ファクシミリ木口木版の採用は、版画制作に必然的に内在する微妙な本質的問題と関係している。すなわち、例えば木版画の場合、厳密に言えば、原画作者と彫版者が同一であっても、

下絵と完成の版画がまったく同一の仕上がりになることはありえない。下絵画家と彫版する者が異なるなら、なおさらである。その場合、原画から版木に下絵が写され、写された「原画の下絵」に沿って彫版がなされることになる。いわゆる二重の翻訳と誤差が生じる。芸術性の求められる作品であればあるほど、その翻訳の微妙なズレも致命的となる。

言うまでもなく、メンツェルは版木にみずから下絵を描くことでこの翻訳のズレを最小限に食い止めようと試みたのである。

しかしながら、問題はその後で生じた。彫版を委ねたパリとロンドンの版画工房から戻った作品の出来映えが惨澹たるものであったからである。この出来事はメンツェルに「少なからぬ憂慮と不安を与えた。なぜなら彼は、パリの彫版師たちの不注意でぞんざいな仕事ぶりを退けるしかなかったからである。彫版師たちは元の手本を自由気ままにありふれたものにしてしまう自分たちのやり方に固執し、綿密な精確さで転写する方法に慣れようとはしなかった。しかし、几帳面で猜疑心の強いこのベルリン人は容易には満足せず、なにものにも惑わされず、頑固に倦むことなく、しばしば嘲笑的に、激しく、荒々しく事に当たった。⁸⁾」出版者への手紙の一つには次のように書かれている。「あのムッシューたちにお願ひしたいのですが、私の図案をあのうにいたずらっぽく粗雑に扱うのは金輪際やめていただきたい。⁹⁾」

このような経緯で方針は変更され、メンツェルの綿密な指示のもと、ウンツェルマン、クレッチュマー、フォーゲル兄弟、ゲオルギー、ハルテンバハといったドイツ人彫版師とドイツ在住のイギリス人ベネワースらに彫版が託され、ファクシミリ木口木版の試みが完成する。『大王伝』のページの進行には、こうしたドイツの木版彫り師たちの完全な忠実さへの進歩の跡が窺

え、彫版における鋭さと繊細さは比類なく、元の図案の魅力に匹敵するように思われる。

4. テキストと挿絵

『フリードリヒ大王伝』の本文は、第1巻「青春」、第2巻「栄光」、第3巻「英雄」、第4巻「老年」の4部構成で、全45章から成立っている。20分冊で刊行された初版の版形は大型八つ折りであり、総頁数は625頁に及び、挿絵の数は400点に近い。

一般に挿絵は、その性格上、物語ないし叙述の内容を読者に具体的に理解させるための説明的機能を有している。その際、挿絵はテキストを忠実に視覚化し、テキストの言葉を具象的に再現することで読者の想像力を喚起し補助する役目を担う。『大王伝』の中でメンツェルが果たすべき役割は、まず第一にクーグラーのテキストを自己の写実的挿絵を通じて読者に理解させることであった。テキストの中に置かれたそうした目的を持つ挿絵の典型の一例を第1巻「青春」において見てみよう。

第1巻「青春」は、フリードリヒの誕生から父フリードリヒ・ヴィルヘルムの死までを描いている。誕生から幼年期のエピソード（第1章～第3章）、父と子の不和（第4章～第8章）、ラインスベルク宮での新婚の華やかな日々（第9章～第11章）、父の死（第12章）を内容とするこの巻では、本編への序章として、即位以前の王太子フリードリヒの姿が物語的筆致で叙述されてゆく。中でも、軍人王として知られる父フリードリヒ・ヴィルヘルムと息子フリードリヒとの、徐々に深まりゆく確執と不和、逃走と処罰、ようやく訪れる和解をめぐる一連の有名なエピソードは、当時の教養階層には興味深い読み物となったはずである。メンツェルの挿絵は筆者クーグラーのこうした叙述を的確に視覚化し、その理解を補助している。父に随行した旅

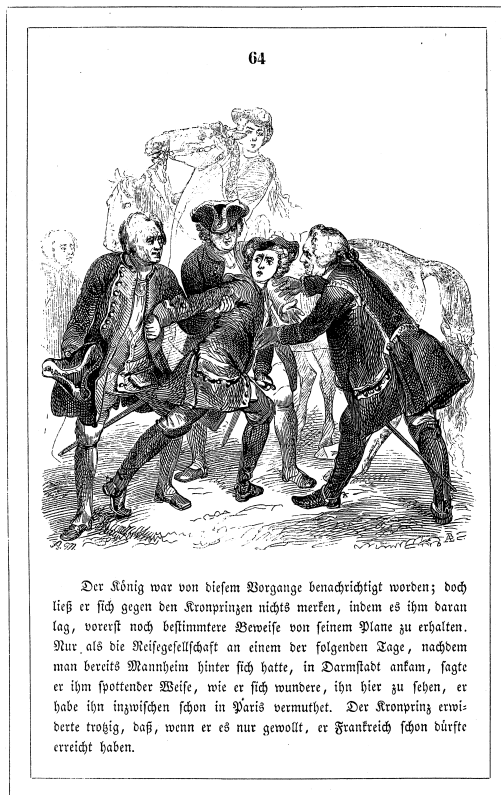


図1

の途上、逃走計画を実行に移そうとしたフリードリヒのもくろみが失敗に終わる次の劇的な場面などはまさにその好例といえる。

「ロコフ大佐や彼の近侍と同じ納屋で一夜を過ごすことになった王太子は、いそいでこの機会にふさわしい計画を練った。王太子は王の小姓が気がよく騙されやすいことを利用した——この小姓はカイトの弟であった——王太子はこの小姓に、村から遠からぬ場所で色事を楽しんでくる、については翌朝四時に起こし、馬を用意しておいてほしい、とひそかに頼んだ。馬の調達は容易であった。ちょうどその場所で馬市が開かれていたからである。小姓は喜んでその用意をした。しかし小姓は、王子を起こすかわりに、寝床を間違え、近侍の目を覚ましてしまった。近侍は機転を利かし、疑わしいなどという

振りもせず、静かに寝たまま、その先何が起こるのか待っていた。彼が目にしたのは、王太子が飛び起きて急いで服を着る様子であった。しかし王太子が身に着けたのは軍服などではなく、フランス製の服と赤い外套であった。この外套は、旅の途中で王太子がひそかに作らせておいたものだった。王太子が納屋を出るや否や、近侍はすぐさまこの出来事をロコフ大佐に通報した。大佐は王のお供の中から三人の士官を急いで起こし、皆はいやな予感を感じながら、王太子の搜索に出立した。少しして士官たちは馬車で、馬車に寄り掛かり小姓を待ちわびている王太子を見つけた。フランス風の服を見て彼らは怪しいと感じたが、しかるべき恭しきで、どうしてこんなに早くお出かけなのですかと尋ねた。王太子はこの突然の予期せぬ言葉に憤りと絶望でいっぱいになった。もしも王太子が武器でも持っていたら、最悪の事態が起こっていたかもしれない。王太子は短く荒っぽい返答をした。王はすでにお目覚めで、半時後にはご出発になられます、お目にとまらぬよう大至急お着替え下さい、とロコフ大佐が述べた。王太子はそれを拒み、自分は散歩に出かけるつもりなのだ、旅の支度は必ずする、と云った。そこへあの小姓が馬を数頭連れてやって来た。その時、王太子が急いでそのうちの一頭に跨ろうとした。しかし士官たちがそれを止め、死にものぐるいで抵抗する王太子を無理矢理に納屋へと連れ戻し、ふたたび軍服に着替えさせた。¹⁰」

初版では、見開き62頁から63頁にかけて述べられたこの事件の瞬間を表現する当該の挿絵は、次ぎにめくられる64頁に比較的大きな版形で配置されている。ここでは、まずテキストがあり、そしてその後に挿絵が続く。当然のことであるが、テキストと、それを描く挿絵は可能な限り近くに置かれることが望ましい。

しかし、メンツェルがつねに作者クーグラ

のテキストをただ忠実に表現し再現しようと意図していたわけではないことも明らかである。メンツェルは、時にテキストを解釈し、またその内容を独自に表現しようと試みる。剣を抜いて断崖絶壁に立たつフリードリヒの姿（36章）は苦境に立つ主人公の象徴的描写であり、戦場の屍の中に呆然と蹲る兵士（37章）は戦いの悲惨さに対するメンツェル流の悲哀の感情の表現のように映る。こうした絵が『大王伝』の挿絵の質を高める要因のひとつとなっていることは明らかである。

ところで『大王伝』には、機能と目的の点で、



図 2



図 3

Drittes Capitel.

Die Knabenzeit.



it dem Anfange des siebenten Jahres endete die weibliche Erziehung des Kronprinzen. An die Stelle der Gouvernanten traten nunmehr der Generallieutenant Graf von Finkenstein, als Oberhofmeister, und der Oberst von Kalkstein, als Unter-Gouverneur. Die Söhne dieser beiden verdienten Männer, sowie die markgräflichen Prinzen des Hauses, wurden die Spielgefährten des Thronerben; das kindliche Verhältniß zu dem jungen Grafen von Fin-

図 4

こうしたいわゆる説明的挿絵とは本質的に異なる形式の挿絵が点在する。それは、各章の冒頭を飾る章頭飾り絵とイニシャル（装飾頭文字）である。

比較的に大きな章頭飾り絵も小型のイニシャルも、共通して言えることは、ともにそれらがきわめて自由な着想に基づいて描かれている点であろう。すでに述べたテキスト中の挿絵に比較するなら、その度合いは明かに顕著である。テキスト中に点在する絵が、読者の理解を助け、テキストを補完する意図で描かれたのであれば、章頭飾り絵もイニシャルも読者の想像力を喚起し、刺激するために描かれたとでも言うべき種類のものに他ならない。新たな章を読み始めようとする読者は、そうした章頭図を前にして、その後に展開される出来事と事件をいやがうえにも予感することになる。

写本時代からの遺産としてのイニシャルには、その小さなスペースの中にメンツェルの独創的な遊戯精神が随所に認められる。画家はここで自己の豊かな着想と遊び心で自由自在に卓抜な画才を発揮している。

こうした作画の姿勢を考えると、『大王伝』においてメンツェルが試みようとした事柄の本質が明瞭になってくる。そのことを研究家ラウヴ

ェは次のように述べている。

「原画作者であるメンツェルも自分の課題とともに成長した。まさにこの課題とともに、豊かで生気に満ちた彼固有の描写スタイルが今や展開され形作られた。彼はもはや、たとえばホレース・ヴェルネのような手本を眺める必要がなくなった。ヴェルネの素っ気ない報告調などは、ここで示される想像力の豊かさに比べればはるかに劣っている。メンツェルは、並々ならぬ手腕で、全体を、人々を、時代を描く。舞台はプロイセン、時代はロココの世紀であるが、主人公の現実時は空を越えてわれわれ読者に馴染み深いものとなる。そのわけはきっと、メンツェルが、自分の描くフリードリヒを普通の人間として眺め、また彼を、自分の運命に置かれたごくありきたりの誰かとして見たからだ。メンツェルはフリードリヒを、ある意味では市民として、フォアメルツ風に眺めたのである。彼が見たフリードリヒの姿は、君主を憎み民衆に敬意を払う君主であり、国民の中に生きる老フリッツであった。¹¹⁾

『フリードリヒ大王伝』は刊行後まもなく好評を博した。その理由のほとんどがメンツェルの挿絵にたいする高い評価であった。最終分冊が1842年秋に出版される以前に、早くもいくつもの別の仕事の依頼が芸術家のもとに舞い込み、出版者との交渉が始まった。それらの仕事とは、フリードリヒ大王時代の將軍たちの立像を手本とする一連の図案の制作であり、それは後に『フリードリヒ大王の兵士たち *Die Soldaten Friedrichs des Großen*』と題された木版画集において具体化した。また、芸術家は引き続き同時に、別の学問的大作の準備作業に取りかかることになる。これは後日、大型四つ折り版三巻の『フリードリヒ大王の軍隊 *Die Armee Friedrichs des Großen in ihrer Uniformierung*』として

刊行される。そして最後にまたしても新たな計画が生じ、ふたたび膨大な計画が彼の視野に飛び込む。アカデミー版フリードリヒ大王著作集の挿絵制作であった。

註

- 1 Franz Kugler, *Geschichte Friedrichs des Grossen*. Geschrieben von Franz Kugler. Gezeichnet von Adolph Menzel. Leipzig, Verlag der J. J. Weber'schen Buchhandlung, 1840. VIII, 625 S. Holzschnitte, lex. 80.
 - 2 Vgl. *Geschichte des Kaisers Napoleon* von P. M. Laurent. Illustriert von Horaz Vernet. Leipzig. Verlag von Johann Jakob Weber. 1839.
 - 3 Vgl. Ingeborg Becker, » *Friedrich über Alles* « — *Menzel und die Buchillustration*. In : *Adolph Menzel. Zeichnungen, Druckgraphik und illustrierte Bücher*. Ein Bestandskatalog der nationalgalerie, des Kupferkabinetts und der Kunstbibliothek. Staatliche Museen Preußischer Kulturbesitz. Berlin 1984. S. 44-51.
 - 4 Franz Kugler, *Geschichte Friedrichs des Grossen*, S. V-VIII.
 - 5 *Historischer Nachweis zur Verständigung einiger Illustrationen*. In : *Geschichte Friedrichs des Grossen*, S. I-II.
 - 6 *Adolph von Menzels Briefe*. Mit Unterstützung der Erben des Meisters gesichtet und hrsg. Von Hans Wolff, Einleitung von Oskar Bie, Berlin 1914.
 - 7 Elfried Bock, *Adolph Menzel. Verzeichnis seines graphischen Werkes*. Berlin 1923.
- Vgl. Arthur Rümmer, *Das illustrierte*

Buch des 19. Jahrhunderts in England, Frankreich und Deutschland, 1790 - 1860. Leipzig 1930. S. 325.

- 8 *Holzschnitte zu den Werken Friedrichs des Großen von Adolph Menzel*. Herausgegeben von Paul Ortwin Rave. Berlin 1955. S. XI.
- 9 *Adolph von Menzels Briefe*.
- 10 Franz Kugler, *Geschichte Friedrichs des Grossen*, S. 62f.
- 11 *Holzschnitte zu den Werken Friedrichs des Großen von Adolph Menzel*. S. XII.